

ISSN 2186-2818

明星大学
日本文化学科紀要

第32号 令和6年3月

題目	山梨方言終助詞サの用法変化に関する考察
筆者	吉田雅子

Department of Japanese and Comparative Culture
School of Humanities
no. 32 2024
Bulletin of Meisei University

山梨方言終助詞サの用法変化に関する考察

吉田雅子*

1. 本稿の目的

本稿では山梨方言終助詞サについて、文献に現れている近世期から現代の用法を提示し、その意味用法変化に関して考察する。

現代共通語において同語形の終助詞「さ」、そして間投助詞「さ」があるが、山梨方言ではサは終助詞として使われ、間投助詞としては現れない。山梨方言終助詞サは現在も全世代に多用され、若年層においても使用率や理解率が高いが、現代のサの用法について中高年層(40代以上)と若年層(30代以下)では顕著な差異が認められる。

以下、第2節で先行研究の概要を述べ、第3節で共通語と比較しながら山梨方言終助詞サの現代用法を記述する。第4節で近世、第5節で近代の用法例を示し、第6節で現代山梨方言での世代差について記述する。

第7節で触れる本稿の結論・主張を先んじて述べると、次のようになる。

- ・山梨方言終助詞サは近世期より文献で確認されるものであり、現代も引き続き使われている。
- ・山梨方言終助詞サの現代用法において、中高年層は提示用法と確信用法にサとサヨーを用い、若年層は提示用法にも確信用法にもサによる表現のみ用いるという変化が生じている。

本稿では論じる際には方言語形をカタカナ表記とし、共通語や共通語訳と区別する(先行研究からの方言語形引用の際にはもとの表記のままとする場合もある)。また山梨方言ではガ行鼻濁音があるが、通常の濁音表記とする。引用の際、歴史的仮名遣いは適宜現代仮名遣いに改めた。文法用語は「終助詞」「間投助詞」などの学校文法のものを使用する。

分析においては山梨方言話者である筆者の内省も利用する。筆者の言語経歴は以下の通りである。

1968(昭和43)年生まれ。0～3歳千葉県習志野市、3～15歳山梨県甲府市、15歳～現在東京都内在住。25歳以降は調査や山梨県内での非常勤勤務等で東京都と山梨県を行き来する生活を送り、日数にしておよそ年の四分の一程度山梨県内に滞在している状況である。

2. 先行研究の概要

2.1. 終助詞「さ」に関するもの

終助詞「さ」については近世語から現代語にいたるまで、国語学、日本語学における多くの研究がある。富樫純一(2011)では他の終助詞「ね」や「よ」に比べると論考が少ないことが指摘されているものの、比較上のことで、一定数はあるといえるため、ここではレファレンスの辞典類で一定の記述量がある代表的なものを挙げるに留める。

国立国語研究所(1951)、小松寿雄(1971)、山口明穂(1971)、小倉肇(1985)、山口明穂(2001)など。『日本国語大辞典 第二版』5(日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編(2001))にも詳しい語誌がある。参照文法として、日本語記述文法研究会編著(2003)に「さ」の記述がある(第6章伝達の様態 第3節伝達態度の様態 2. 伝達を表す終助詞2.4)。

2.2. 日本語諸方言でのサに関するもの

日本語諸方言に見られるサについては、2.1. で述べたのと同様、方言学においても多くの研究がある。方言では、共通語の与格「に」や向格「へ」に主に相当する格助詞サが東日本方言、特に東北方言に使用が多いが、ここでは本稿がテーマとする終助詞サに限って挙げる。なお、先行研究によっては「終助詞」以外に「文末詞」「文末助詞」と称しているものがあるが、学校文法の「終助詞」と重なるものは挙げる。

文法の他に音声音韻や語彙も含めサという方言形を扱っているレファレンスの辞典類で一定の記述量がある代表的なものには次がある。伝統方言に関しては『日本方言大辞典』上(尚学図書編(1989))、藤原与一(1996)に記述が多い。新方言に関しては井上史雄・鎌水兼貴編著(2002)に記述がある。

方言終助詞の全国各地での採集・分析記述の研究書では藤原与一(1985)が詳しい。

地域別の論考では近畿方言を対象とした榎垣実(1955)、沖縄方言を対象とした山西正子(2003)がある。サを含んだンサという形式について論じたものには新潟方言を対象とした吉田雅昭(2009)がある。

山梨方言においては、先述の藤原与一(1985)でも山梨方言の採集例が挙げられている。また藤原与一(2002)では山梨県南巨摩郡鵜沢町十谷での採集例が示されている。秋山洋一(2005)は山梨方言文末詞に関する論考の中でサに触れている。また、水石すみれ(2022)は山梨県甲府市方言の若年層(調査当時インフォーマント年齢21歳から36歳)の用法を分析している。稲垣正幸・清水茂夫(1983)はじめ、山梨方言に関する概説記述や市町村誌での方言項、山梨方言の私家版著作などでもサに言及しているものは多く、山梨方言の中で多用されていることを示すものである。

3. 山梨方言終助詞サの現代の用法

第3節では、山梨方言終助詞サの現代用法の概要について、使用地域、使用度、文法的なふるまい、モダリティの順に述べる。文法的ふるまいとモダリティについてはさらに第6節

で現代に見られる世代差を中心に分析するが、ここでは共通語の「さ」との差異をふまえながら記述する。

筆者は山梨方言に関する先行研究・関連情報のデータベースを作成している。専門的な論文、著作以外にも、在野の研究者による私家版や、エッセイ、雑報なども網羅的に収集しているが、先行研究として引用・参照する可能性のあるレベルのものをデータベース化しており、2023（令和5）年12月の時点では1178点のデータがある。

加えて、山梨方言の語彙データベースを作成している。先行研究にある語彙を中心に、音声声韻事項や文法事項等も含めたデータベースであるが、2023（令和5）年12月の時点では延べ146190点のデータがある。

未見情報もあろうしあくまで筆者が収集作成したデータベースではあるがそういった点もふまえた上で、これらのデータからサに関して論ずべき資料を取り上げることとする。

3.1. 使用地域

県内方言区画での山梨西部方言（国中地方）と山梨東部方言（郡内地方）である。言語島である早川町奈良田方言¹⁾では使用が見られない。なお、奈良田方言では与格と向格に格助詞サが使われる²⁾。

3.2. 使用度

現在も全世代に使用が見られる。中高年層での使用が多いが、若年層にも使用率、理解率がともに高い方言と言える³⁾。中高年層ではサヨーという、サにヨーが加わった形式が多く見られる。サヨーについては3.3.4.と第5節、第6節で後述する。

吉田雅子（2023）で論じた山梨方言終助詞シと同様、サは若年層の使用も多く代表的な山梨方言の一つと言えるものであるが、シに比べてマスコミュニケーション上での使用が少ない。山梨を舞台にした映像作品などで方言終助詞シが出現するのに比較して、サはほとんど聞かれない。これは、方言終助詞としては沖縄方言のサがよく知られていることが理由の一つとなろう。また、共通語の終助詞や間投助詞の「さ」とまぎれて、山梨方言らしさがそう表せないことも理由となると思われる。

方言グッズなどの商業的利用では中高年層が使用するサヨーを伴う語形が採用されることが多い。二戸麻砂彦他編（2015）では、山梨県内で2004年から2015年にかけて作成された販売品、非売品の双方の方言グッズを収集し、採用されている方言内容をまとめ分析しているが、240点の物品に示されている延べ335例の山梨方言のうち、サ単独で現れているものはな

1) 早川町奈良田方言は国中地方にあるが、特に音韻とアクセントの特異性から「言語島」と位置づけられる。言語島（「言語の島」、「方言の島」とも）は周囲と言語的に大きく異なる地域のことで、言語上の孤立を島に例えたものである。

2) 早川町奈良田方言での格助詞サの用法については、小西いずみ・三樹陽介・吉田雅子（2022）の「3.6.4 与格と向格」で用例と解説を記述している。

3) 筆者が継続している山梨県内でのフィールドワークによる。また筆者は2014年より山梨県立大学の担当授業内で受講生を対象に山梨方言語彙・文法の使用率に関するアンケート調査を実施しており、その結果でもサの使用率、理解率は高くトップである。シがこれに次いで二位となる。このアンケート調査結果については別稿で論じたい。

く、以下のようなサヨーによるものばかりで、延べ6例ある。表記の違いごとに挙げ、サヨー相当部分に下線を引く。

いいさよう、いいさよお (2例)、いいさよお、ほんなこん気にしんでいいさよお、
ほうさよう

3.3. 文法的なふるまい

形態統語的特徴として、3.3.1. ではサの生起環境について、3.3.2. ではサが使用される文タイプについて、3.3.3. ではサに後接する終助詞について述べる。

例文は水石すみれ(2022)に示されるものと同じものを提示した場合はその旨を記す。第6節では水石すみれ(2022)で論じられた若年層用法と、中高年層用法を比較対照するので、論旨を理解しやすくするため可能な限り同じ例文を採用する。特に注記がない例文は筆者の内省による作例である。例文に付す以下の記号⁴⁾も水石すみれ(2022)と同様とする。

- * 文法的に不適格、非文
- ? 不適格ではないが不自然

3.3.1. サの生起環境

動詞、形容詞との共起は以下ようになる。各例文に筆者内省による共通語訳を付した。

- (1) 明日家族で遊園地行くサ <動詞・非過去> (水石すみれ(2022)の(3))
共通語訳：明日家族で遊園地行くんだ
- (2) 昨日家族で遊園地行ってきたサ <動詞・過去> (水石すみれ(2022)の(4))
共通語訳：昨日家族で遊園地行ってきたんだ
- (3) 今の時期、仕事めっちゃくちゃ忙しいサ <形容詞・非過去> (水石すみれ(2022)の(5))
共通語訳：今の時期、仕事めっちゃくちゃ忙しいんだ
- (4) 先週めっちゃくちゃ忙しかったサ <動詞・過去> (水石すみれ(2022)の(6))
共通語訳：先週めっちゃくちゃ忙しかったんだ

動詞、形容詞にサは直接後接し、過去形、非過去形は問わない。共通語訳から示されるように意味としては「～んだ」という「のだ相当形式」にあたる。

名詞、形容動詞語幹との共起は以下ようになる。

- (5) これからバイトサ <名詞・非過去> (水石すみれ(2022)の(11))

4) 水石すみれ(2022)ではこの他の記号に「△：許容度に個人差があるもの」を設定している。インフォーマント6人の調査結果を正確に示すためであると推測されるが、「△」の場合は水石本人の内省を主軸に分析を進めている。そのため本稿でも水石本人の文法性判断をもって、「△」を例文ごとに「*」や「?」や無記号(適格)に変えた。

共通語訳：これからバイトなんだ

- (6) 先週週5でバイトだったサ <名詞・過去> (水石すみれ (2022) の (12))

共通語訳：先週週5でバイトだったんだ

- (7) この女優さん、すごい好きサ <形容動詞・非過去> (水石すみれ (2022) の (13))

共通語訳：この女優さん、すごい好きなんだ

- (8) この女優さん、昔すごい好きだったサ <形容動詞・過去> (水石すみれ (2022) の (14))

共通語訳：この女優さん、昔すごい好きだったんだ

動詞、形容詞と同様、サは名詞、形容動詞語幹に直接後接し、過去形、非過去形は問われない。共通語訳から示されるように意味としては「～んだ」という「のだ相当形式」にあたる。

以上 (1) から (8) で、音調として共通する特徴は、サが下降音調で発音されるということである。この下降音調はアクセントとも文末イントネーションとも捉えられ、分かちがたい面があるためここでは「音調」とするが、必ず下降音調となることが共通語の終助詞や間投助詞「さ」とは異なる特徴である。

(1) は共通語の場合は「明日家族で遊園地行くのさ」と準体助詞「の」を介する形になるが、「さ」の部分は上昇調も下降調も出現し、それで話者の心的態度が表明される。また (1) に共通語で間投助詞「さ」を入れると「明日さ、家族でさ、遊園地行くのさ」のようになるが、間投助詞「さ」は上昇調で発音されるだろう。

山梨方言終助詞サの韻律的特徴は、下降音調が必ず伴うことである。

その他の共起関係として、準体助詞「の」(「ん」と、丁寧体とは、以下のように共起できない。

- (9) *これからバイトに行くのサ <準体助詞「の」> (水石すみれ (2022) の (19))

- (10) *これからバイトに行くんサ <準体助詞「ん」> (水石すみれ (2022) の (20))

- (11) *これからバイトに行きますサ <丁寧体> (水石すみれ (2022) の (21))

水石すみれ (2022) では (10) を「?」と判定しているが、筆者の内省では (9) と同じく不適格となる。2.2. で触れたように水石すみれ(2022)は若年層の用法を分析対象としているため、これは世代差の例と考えられる。準体助詞を介する用法としてはンサの形から新方言として広まっていく可能性が考えられる。準体助詞を介する場合「の」に先んじて「ん」という形が採用されるのは、サが意味としては「～んだ」という「のだ相当形式」にあたることが関係するだろう。「のだ」よりは話しことば的な「んだ」から許容されていく様相が示唆される。

3.3.2. サが使用される文タイプ

サは平叙文に用いる。3.3.1. の (1) から (8) は全て平叙文である。用いることができないのは疑問文、命令文・禁止文、依頼文、勧誘文、意志文である。

- (12) *どこに行くサ? <疑問詞疑問文> (水石すみれ (2022) の (22))
疑問詞疑問文の山梨方言例:ドケー イクデー? (どこへ行くのか?)
- (13) *太郎って逆上がりできるサ? <真偽疑問文> (水石すみれ (2022) の (23))
真偽疑問文の山梨方言例:タローワ サカアガリン デルケ? (太郎は逆上がりができるのか?)
- (14) *ちゃんと勉強しろサ <命令文> (水石すみれ (2022) の (24))
命令文の山梨方言例:ジョーブ ベンキョー シロシ (しっかり勉強しろよ)
- (15) *甘い物を食べるなサ <禁止文>
禁止文の山梨方言例:アマイ モノー {タベチョ/タベチョシ/クッチョ/
クッチョシ} (甘い物を食べるなよ)
- (16) *ちょっと手伝ってサ <依頼文> (水石すみれ (2022) の (25))
依頼文の山梨方言例:チット テンダツテクリョーシ (ちょっと手伝ってくれよ)
- (17) *一緒に行こうサ <勧誘文> (水石すみれ (2022) の (26))
勧誘文の山梨方言例:イッション|イカズ/イカザー/イカダー/イッチャー
/イクジャン| (一緒に行こうよ)
- (18) *今日こそ頑張ろうサ <意志文> (水石すみれ (2022) の (27))
意志文の山梨方言例:キョーコン {ガンバラズ/ガンバルジャン/ガンバル|
(今日こそ頑張るぞ/頑張るよ)

水石すみれ (2022) では (12) (14) (16) (17) (18) を「? 不自然」と判定しており、筆者の判断と異なる。筆者の判断と同じになるのは (13) の真偽疑問文でサが「*不適格」となる例のみである。

若年層用法では疑問詞疑問文、命令文・禁止文、依頼文、勧誘文、意志文が「*不適格」と判断されず「? 不自然」レベルであるのは、サの持つ音調が関係していると考えられる。3.3.1. で述べたようにサは必ず下降音調で発音される。(13) のような真偽疑問文は文末上昇イントネーションを伴うため、サの不適格性が若年層用法でも引き継がれ保持されていると考えられる。

3.3.3. サに後接する終助詞

サに後接する終助詞としてヨ、ヨー、ネ、ナが挙げられる。

- (19) A 「今日もバイトあるの?」
B 「そりゃあるサヨ」(水石すみれ (2022) の (29))
- (20) A 「今日もバイトあるの?」
B 「そりゃあるサヨー」
- (21) A 「犯人捕まったの?」
B 「うん、カメラに映ってたんだって。そりゃすぐ捕まるサネ」(水石すみれ (2022)

の(30))

(22) A「犯人捕まったの？」

B「うん、カメラに映ってたんだって。そりゃすぐ捕まるサナ」(水石すみれ(2022))

の(31))

水石すみれ(2022)ではサに「提示用法」と「確信用法」の二つがあることを指摘している。提示用法は「自分の体験やエピソードなどの情報を「聞き手が知らないだろう」と考えて提示する」用法、確信用法は「それは当然のことである」と考えて情報を提示する」用法と定義している。

(19)(21)(22)は、水石すみれ(2022)では確信用法の例文として示し、提示用法では(23)のように終助詞は後接しないまたは不自然としている。

(23) [提示用法] 実は明日からハワイ行くサ {*ヨ/?ネ/?ナ} (水石すみれ(2022)の(28))

筆者の内省による中高年層の用法では、(24)のようになる。

(24) [提示用法] 実は明日からハワイ行くサ {*ヨ/*ヨー/*ネ/*ナ}

「実は明日からハワイ行くサ」となり、終助詞は後接しないことは若年層の用法と同じである。

3.3.4. サヨー、ヨーについて

(20)で示した「あるサヨー」のサヨーは3.2.でも述べたが、中高年層では多く使われる形式であり、商業的利用でもサ単独よりサヨー形式の方が採用されている。

2.2.で触れたように、山梨方言に関する文献でサに言及したものは数多くあるが、その中からサの用例記述が多い渡辺雄喜(2005)にある用例数と用例を挙げる。

サの用例：延べ13例

アケチャットーサ、イッテトーサ、カッテクレタサ、コロマケサ、コンサ、ササラ
ホーサラサ、シトーサ、ネーサ(3例)、ホーサ、ホノマンマサ、ヤスブシンサ

サヨーの用例：延べ7例

イクサヨー(2例)、イッテルサヨー、トットクサヨー、ヒッケサヨー、ホーサヨー、
ヤッチモーサヨー

サナの用例：1例 ホーサナ

渡辺雄喜(2005)は、山梨方言の俚言を見出し語として挙げ、その使用例を会話文形式で示し解説を加えるという方法で記述されている。見出し語ごとにある会話文にサの用例が多く出現することから、山梨方言談話で多用される終助詞であることがわかる。サナは1例、サ

ネは見られず、サとサヨの例が多い。これは筆者の内省や観察にも合致し、サ、サヨが多用される形式といえる。

水石すみれ(2022)ではサヨの形式は扱われず、若年層ではサが使用の中心となりサヨの使用は減少していると考えられる。

サヨは韻律に特徴があり、サが下降(低)、ヨのヨの部分が上昇し(高)、長音部分がまた下降する(低)という音調となる。

アクセントと捉え高い拍をH、低い拍をLで記述すると、次のようになる。

サ L
サヨー LHL
イクサヨー LHLHL
ホーサヨー HLLHL

サヨの「下がって(サ)上がって(ヨ)下がる(ー)」という音調は特徴があり、上がり下がりも終助詞表現のプロミネンス、インテンシティーが現れて拍ごとの振幅が大きいため、耳に付きやすく、山梨方言らしさを感じられるものである。語形としても、サ単独に対してサヨは方言として意識されやすいものであろう。商業的利用でサヨが採用される所以である。同時に、若年層で使用が減少している所以ともなろう。

3.2.において、商業的利用でサヨが採用された語例・文例を挙げたが、「いいさよう」「いいさよお」といった直音表記の他に「いいさよお」「ほうさよう」のような表記が使われているのは、特徴的な音調を表現しようとしている面もあると思われる。

サヨは一語的にまとまった形式ともいえるが、語構成としては「終助詞サ+終助詞ヨ」に分けられると考える。山梨方言では終助詞ヨが使用されるが、それとは別に終助詞ヨを立てることを筆者は主張する。

山梨方言の終助詞ヨは、共通語の終助詞「よ」と意味用法が重なる部分が多い⁵⁾。

ヨは、「終助詞ヨがプロミネンス、インテンシティーによって長音化されたものとは別のもの」ととらえるべきと考える。

大きな理由はヨまたはそれを長音化した「ヨー」と、サにつくようなヨの音調の違いである。

次の(25)のような共通語と意味用法が重なる終助詞ヨは上昇調も下降調も現れる。

- (25) a. あれがうちの犬だヨ(ー)(↑ 文末上昇)
b. あれがうちの犬だヨ(ー)(↓ 文末下降)

しかし(26)のようなヨーは、サヨに現れるのと同様、ヨのヨの部分が上昇し(高)、長音部分がまた下降する(低)という音調で、アクセント表記すると「ヨー H L」となる。

5) 共通語終助詞「よ」に近い職能を持つ山梨方言終助詞にヤがある。「私が行ったヤ」(私が行ったよ)、「私がやるヤ」(私がやるよ)のように使われる。共通語終助詞「よ」に近いものはヨーよりこのヤと考えられる。山梨方言終助詞にヤについても別稿で論じたい。

(26) あれがうちの犬だヨー (ヨーのアクセントはHL)

渡辺雄喜(2005)ではサヨーの使用例は「サ、ヨー」のように記述しており、ヨーで一語という意識があるかと思われる。

ヨーは、山梨方言に関する概説記述や市町村誌や私家版著作で、見出し語として立項されたり単独で記述されることはほぼないが、ヨーがついた語形や表現は頻出する。山梨方言について著作が多い五緒川津平太は、「やあだよ」「困ったよ」などを挙げて「山梨のおばちゃん語」として紹介している⁶⁾。「おばちゃん語」ということばからも推察されるように、サヨーやヨーを多用する世代は中高年層であり、若年層では使用が少なくなっている。

3.4. モダリティ

サのモダリティは、聞き手に対する発話態度・伝達態度を表すもの(発話・伝達のモダリティ、対人的モダリティ、聞き手めあてのモダリティ)に分類される。機能としては「述べ立て」、「強調」が主となる⁷⁾。

4. 近世甲州方言での終助詞サの用法

第3節で山梨方言終助詞サ、またサの含まれるサヨーという語形や、関連して山梨方言終助詞としてのヨーについて、現代用法を概観した。第4節ではそれら現代用法に至るまでの過程をとらえることを目的に、近世期資料に表れているサの用例を示す。

4.1. 「旧観帖」(1805(文化2)年～1809(文化6)年)

近世期資料として滑稽本の「旧観帖」(きゅうかんじょう)を示す。「旧観帖」は全三編。初編は1805(文化2)年、二編は1806(文化3)年、三編は1809(文化6)年に栄邑堂(村田治郎兵衛)より刊行された。作者は二編の下巻のみ十返舎一九、他は感和亭鬼武(かんわていおにたけ)。内容は、奥州、越後、甲州の三人が江戸で同宿し江戸を見物するというものである。甲州は「葦崎辺の人」とあり、現在の葦崎市周辺という設定である。

「旧観帖」については、石川博(2009)で資料分析と甲州方言の分析がなされている。それによると、作者の鬼武は文化期に一橋殿に仕えており、葦崎は1794(寛政6)年まで一橋家の所領であったことから、鬼武の周辺に葦崎に暮らした者がいたことも考えられるとのことである。滑稽本の特性上誇張がみられると思われるものの、甲州方言の特徴はよくとらえられていると述べている。

以下、石川博(2009)より、サの用例を引く。冒頭の数字は石川博(2009)に付されている用例の番号。仮名遣いは原本通りとし、サの部分は筆者が下線を付す。

6) 五緒川津平太(2009)のp86。他にも五緒川津平太(2013)のp193、五緒川津平太(2016)のp183、五緒川津平太(2020)のp67、p71、p165、五緒川津平太(2021)のpp148-151などに現れる。五緒川津平太の著作ではサやサヨーによる語形や表現も多数記述されている。

7) 井上優(2002)の分類にならった。サのモダリティについても今後別稿で詳細に論じたい。

<サ>

初編

[8] それさ、竹の皮でこしらへたのよ。

[19] イヤサ、わるひがつてんの男だ。コレサ、かわずに、銭をやらずに

二編

[30] どうでも能(よ) いやうに案内(あんない) せるがましさ

[67] さやうさ二度とふたたびくはずもんじやアござらぬはい

三編

[80] それサ、もし

[81] さればサ、よた(悪)ばアさまには是非がない。

サは [30] は終助詞と判断されるものであるが、他では句末に現れ間投助詞的な使用の
が多い。

「旧観帖」では、ヨーという終助詞が多く見受けられる。終助詞ヨよりも多く現れている。
以下にヨー、ヨの用例を引く。

<ヨー>

二編

[29] わしらが国でもそう言(ゆい)ますヨウ

[35] わしらの国にも無塩(なま)はないよう

[41] 自分のことは言(いは)ずに、他(ひと)のことをめつたに気をつけなさるよう

三編

[69] なに、さうゆはず(不可言) よう

[70] ヤレ又よたばアさまにはこまるよう。

[73] それがよくおざるよう。

[74] ヤ、そんながかんばんのうやぶりめさつたアについて、そのゆいわけ(言訳)に
寄つたからよう、

[75] なるほどお江戸の繁花(はんくわ)にはたまげるよう。

[75] あのまづらつかいの橋のうへの人はよう、コリヤちとむかひな茶屋に腰をかけ
て、

[77] わしにはらはせるではおざるよう

<ヨ>

初編

[8] それさ、竹の皮でこしらへたのよ。

三編

[98] かんぢやうはおまへかたばかりにはさせられぬことよ

[99] おこれは、きのどく千万をした事よ、

ヨーの例では、[70]の「こまるよう」や[75]の「たまげよう」などは現在でも使われているようなものである。この「旧観帖」に現れているヨーを、現時点では山梨方言終助詞ヨーの初出と考えてよいのではないか。

4.2. 「鄙通辞」(1810(文化7)年)

近世期資料として滑稽本の「鄙通辞」(いなかつうし)を示す。「鄙通辞」は上下二冊。1810(文化7)年、作者は棹歌亭真楯(とうかていまかじ)。出版書肆は村田治郎兵衛である。

「鄙通辞」については、石川博(2004)で資料分析と甲州方言の分析がなされている。それによると、作者の棹歌亭真楯は狂歌師であり国学者である林国雄で、甲斐の文人の筆跡を集めて出版した「風流人海」にその名と短文と狂歌が載る。棹歌亭真楯は甲斐国在住ではないが甲斐の人々と交流があったため収録されたと考えられるとのことである。棹歌亭真楯は発話をできるだけ正確に写そうとする意識があったことがうかがえるが、言語による行き違いを滑稽の主軸としていることから誇張もあると述べている。

以下、石川博(2004)より、サの用例を引く。冒頭の数字は石川博(2004)に付されている用例の番号。仮名遣いは原本通りとし、サの部分は筆者が下線を付す。

上巻

- [1] 大便所(だいべんじよ)へいきでへと申ことさ。
- [11] それから順にのぼせる(上へ回ス)のがゑいのさ

下巻

- [17] 昔からの御ゆるしでよばへば勝手しだいさ
- [18] それはむかしのことさ
- [19] あれを江戸の衆に見せたいものさ
- [23] 蓑(みの)のことさ
- [38] わしじやとてそふでいすはさ
- [40] 世の中はたがひにうぬぼれを仕合う(しあつ)てくらすでいすのさ

[11][40]では準体助詞を介する「のさ」、[38]では終助詞ワを介する「はさ」(発音はワサ)の例が見られる。

4.3. 「甲州雑話文集」(1843(天保14)年以降数年間)

近世期資料として「甲州雑話見聞集」を示す。「甲州雑話見聞集」は甲州文庫⁸⁾蔵の資料である。石川博(1997)で全文の翻刻、同(1999)で資料分析と本文注釈がなされている。筆者未詳だが内容記述から甲州の人であることは間違いない。成立年は1843(天保14)年以降の数年間と推測される。

以下、石川博(1997)より、サの用例を引く。冒頭の数字は石川博(1997)に付されている

8) 功力亀内(1889(明治22)年山梨県中巨摩郡豊村上今井出身)が大正期から戦後にかけて収集した甲州に関する古文書・古記録等23000点に及ぶ史料コレクションで、資料の年代は1662(寛文2)年から1854(嘉永7)年にわたる。1951(昭和26)年に山梨県立図書館に譲渡され、現在は山梨県立博物館に移管されている。

丁符。仮名遣いは原本通りとし、サの部分は筆者が下線を付す。

[2ウ]「わちきはいなかさ」

[5ウ]「おれは甲府(かうふ) さ」「くるわうちさ」

[6オ]「おれかへ、二本さすのがせうばいさ」「こんど江戸(ゑど)へいくのはねむづかし
いでいりさ」

[6ウ]「こんどは借金(しやつきん)のかたに吉町(よししてう)へ身をうつてかげまになら
ふとおもふのさ、」

[7オ]「そうさ江戸へいきやあ甲州ざるとつて、ごふてきもてはやされるのさ」

[7ウ]「それがいひのさ、」

[6ウ] と、[7オ] の文末部では準体助詞を介する「のさ」の例が見られる。

以上、4.1.で「旧観帖」、4.2.で「鄙通辞」、4.3.で「甲州雑話文集」の用例を挙げた。各資料、全体を通して読むと、現代の山梨方言終助詞サと同じ用法ではないかと思われるものも散見される。サではないが「旧観帖」に現れるヨーなども同様の印象を受ける。

5. 近代山梨方言での終助詞サの用法

第5節では明治から昭和戦前の近代期資料に表れているサの用例を示す。

第3節の冒頭で触れた、筆者が作成している山梨方言に関する先行研究・関連情報のデータベースでは近代期の資料は289件あるが、サについて触れているものは、管見の限りでは大正期の『松のしらべ』(赤岡重樹編(1925))のみである。

『松のしらべ』は山梨県立甲府高等女学校の校友会会誌で、同校教員の赤岡重樹が編集発行人を務めている。赤岡による巻頭言「伝説と方言」によると、同校生徒が夏季休暇中に家族親類知り合い等より採集した方言が掲載されている。方言語例・用例が822例ある大きな資料であるが、サの用例に当たるものは次の1例のみ、サヨーによるものである。

いやぢあいゝさよ いやではよろしい

現時点ではこれがサヨーの初出例と思われる。

資料に現れる用例はごく少ないが、サやサヨーによる表現は使われていたことは確かであろう。第4節で確認したように、サやヨーの例があり、現代でも使用される状況を考えると、近世以降引き続き近代期にも使用されていたと捉えるのが妥当であろう。近代期は方言研究においては俚言採集や方言地理学の分野が盛んであり、サのような文法に関する記述が薄い面があることが、近代期資料にサが現れにくい一因であると考えられる。

6. 現代山梨方言での終助詞サの世代差

第4節で近世期、第5節で近代期のサの用法を挙げた。また先んじて第3節で現代の用法を記述した。第3節では水石すみれ(2022)の用例と比較しながら中高年層(40代以上)と若年層(30代以下)の用法世代差を述べたが、その概要は次の(27)から(32)のようなものであった。

- (27) サの生起環境について、中高年層は準体助詞「の」「ん」を介するノサ、ンサは用いないが、若年層はンサを許容しつつある。(3.3.1.)
- (28) サが使用される文タイプについて、中高年層はサを平叙文のみで用いるが、若年層は平叙文の他に疑問詞疑問文、命令文、依頼文、勧誘文、意志文で使用を許容しつつある。(3.3.2.)
- (29) (28)の世代差には音調が関わる。中高年層と若年層は真偽疑問文でサを用いないことは共通するが、これは真偽疑問文は文末の上昇調が必須だからである。サは下降調で発音される終助詞だからである。(3.3.2.)
- (30) サに後接する終助詞について、提示用法においては中高年層はサに終助詞を後接させないが、若年層はサネ、サナを許容しつつある。(3.3.3.)
- (31) 提示用法と確信用法の双方で、中高年層はサヨーを用いるが、若年層はサヨーを用いずサによる表現を用いる。(3.3.3、3.3.4.)
- (32) (31)の世代差には音調が関わる。サヨーの持つ「LHL」という音調、かつヨーの持つ「HL」という音調は方言らしさを意識させるものである。(3.3.4.)

筆者が特に注目する世代差は(31)である。3.3.3.で触れたように、水石すみれ(2022)ではサに「提示用法」と「確信用法」の二つがあることを指摘し、提示用法は「自分の体験やエピソードなどの情報を「聞き手が知らないだろう」と考えて提示する」用法、確信用法は「それは当然のことである」と考えて情報を提示する」用法と定義している。水石すみれ(2022)は、認識のモダリティ形式とサの共起制限を分析し、提示用法のサは認識を表す形式の多くと自由に共起できるのに対し、確信用法のサは必然性を表す「にきまっている」とのみ共起するとしている。

これに対し筆者の内省による中高年層の用法は、提示用法と確信用法で若年層に比べて多くサを用い、提示用法と確信用法でともに必然性を表す場合に「にきまつてる」を入れずにサとサヨーを用いる、というものになる。

以下、水石すみれ(2022)の例文により、中高年層と若年層の文法性判断を示す。

<提示用法>

- (33) 推量「だろう」(水石すみれ(2022)の(32))

中高年層：*太郎は来るだろうサ

若年層：?太郎は来るだろうサ

- (34) 推量「ラ」⁹⁾(水石すみれ(2022)の(33))
中中年層：*太郎は来るらサ
若年層：*太郎は来るらサ
- (35) 推量「ズラ」(水石すみれ(2022)の(34))
中中年層：*太郎は来るずらサ
若年層：?太郎は来るずらサ
- (36) 蓋然性・可能性「かもしれない」(水石すみれ(2022)の(35))
中中年層：実は太郎、明日来ないかもしれないサ(より自然な用法例：実は太郎、明日来んかもしれないサ)
若年層：実は太郎、明日来ないかもしれないサ
- (37) 蓋然性・必然性「にきまっている」(水石すみれ(2022)の(36))
中中年層：太郎は来るにきまつてるサ(より自然な用法例：太郎は来るサヨー、太郎は来るサ)
若年層：*太郎は来るにきまつてるサ¹⁰⁾
- (38) 証拠性・観察「みたいだ」(水石すみれ(2022)の(37))
中中年層：パーティーやらないみたいサ(より自然な用法例：パーティーやらんみたサ)
若年層：パーティーやらないみたいサ
- (39) 証拠性・推定「そうだ(～しそうだ)」(水石すみれ(2022)の(38))
中中年層：太郎、最近忙しそうサ
若年層：?太郎、最近忙しそうサ
- (40) 証拠性・推定・伝聞「らしい」(水石すみれ(2022)の(39))
中中年層：太郎、結婚したらしいサ
若年層：太郎、結婚したらしいサ

<確信用法>

- (41) 推量「だろう」(水石すみれ(2022)の(40))
A「太郎、パーティー来るかな？」
中中年層：B「*来るだろうサ」
若年層：B「?来るだろうサ」
- (42) 推量「ラ」(水石すみれ(2022)の(41))
A「太郎、パーティー来るかな？」
中中年層：B「*来るらサ」
若年層：B「*来るらサ」
- (43) 推量「ズラ」(水石すみれ(2022)の(42))

9) 「ラ」は山梨方言の推量の助動詞で共通語では「だろう」に相当する。(35)の「ズラ」は山梨方言ののだ推量の助動詞で共通語では「のだろう」に相当する。

10) 水石すみれ(2022)ではこの文法性判断を「△」としているが、水石自身の判断は「内省では強い違和感がある」(p221)と述べているため、本稿では「*」とした。

- A「太郎、パーティー来るかな？」
中高年層：B「*来るぞらサ」
若年層：B「?来るぞらサ」
- (44) 蓋然性・可能性「かもしれない」(水石すみれ(2022)の(43))
A「太郎、パーティー来るよね？」
中高年層：B「来るかもしれないサ」(より自然な用法例：来るかもしれんサ)
若年層：B「*来るかもしれないサ」
- (45) 蓋然性・必然性「にきまっている」(水石すみれ(2022)の(44))
A「太郎、パーティー来るかな？」
中高年層：B「来るにきまつてるサ」(より自然な用法例：来るサヨー、来るサ)
若年層：B「来るにきまつてるサ」
- (46) 証拠性・観察「みたいだ」(水石すみれ(2022)の(45))
A「パーティーやるのかな？」
中高年層：B「やるみたいサ」(より自然な用法例：やるみたサ)
若年層：B「?やるみたいサ」
- (47) 証拠性・推定「そうだ(～しそうだ)」(水石すみれ(2022)の(46))
A「太郎忙しいかな？」
中高年層：B「忙しそうサ」
若年層：B「?忙しそうサ」
- (48) 証拠性・推定・伝聞「らしい」(水石すみれ(2022)の(47))
A「太郎結婚したっけ？」
中高年層：B「結婚したらしいサ」
若年層：B「?結婚したらしいサ」

(33)から(48)の例文分析をふまえ、サの提示用法と確定用法の世代差を表すと、【表1】のようになる¹¹⁾。

11) 【表1】は、水石すみれ(2022)の「表2. 認識のモダリティを表す形式との共起」を私に改め、加筆したものである。「表2」では「だろう」の提示用法が「×」(「*」に相当)になっているが、例文では「?」が付され、本文を読んでも「?」がふさわしく、誤植と考えられるため「?」に改めた。

【表1】サの提示用法と確信用法の世代差

意味的類型		形式	提示用法		確信用法	
			中高年層	若年層	中高年層	若年層
推量		だろう	* - だろうサ	? - だろうサ	* - だろうサ	? - だろうサ
		ら	* - らサ	* - らサ	* - らサ	* - らサ
		ずら	* - ずらサ	? - ずらサ	* - ずらサ	? - ずらサ
蓋然性	可能性	かもしれない	- かもしれんサ	- かもしれないサ	- かもしれんサ	* - かもしれないサ
	必然性	にきまってる	- サヨー - サ - にきまってるサ	* - にきまってるサ	- サヨー - サ - にきまってるサ	- にきまってるサ
証拠性	観察	みたいだ	- みたサ	- みたいサ	- みたいサ	? - みたいサ
	推定	そうだ・ ～しそうだ	- そうサ	? - そうサ	- そうサ	? - そうサ
	推定・ 伝聞	らしい	- らしいサ	- らしいサ	- らしいサ	? - らしいサ

【表1】では、「*、?」にあたる枠は塗りつぶし、使用される形式が目立つようにした。

【表1】からは次の世代差が読み取れる。

- ・中高年層の方がサを使う意味的類型が多く、若年層の方が少ない。
- ・中高年層では、提示用法と確信用法で用法に差異はない。しかし若年層では意味的類型により提示用法と確信用法でサを使うか使わないかの差異がある。
- ・中高年層は必然性を示す場合にサヨーを用いるが、若年層はサヨーを用いない。

以上の特徴をふまえ、さらに意味的類型提示を簡略化して示すと、【表2】のようになる。

【表2】サによる用法の世代差（動詞「来る」を例に）

意味的類型（共通語訳）	中高年層	若年層
「必然性」以外（～んだ）	来るサ	来るサ [*、?もあり]
必然性（～に決まっている）	来るサヨー	来るにきまってるサ
職能分担のありかた	「サ」と「サヨー」での職能分担	「サ」と「にきまってるサ」での職能分担

中高年層が使用するサヨーは共通語訳すると「～に決まっている」となる。これは筆者の内省でもそうなるし、山梨方言の先行研究にもその旨の複数の記述がある。3.3.4. で挙げた渡辺雄喜 (2005) や、砂田貢 (2017) の例を引く。

「……さ、よー」は、「……するに決まっている」の意である。

(渡辺雄喜 (2005)、p60、p87ほか)

…さよー …に決まっているというような時使う。やさしい言い方。(例) 来るさよー。

⇒来るにきまつてる。／行くさよー。⇒行くにきまつてる。 (砂田貢 (2017)、p90)

また、上記以外にも、先行研究で掲出される例文には「-に決まつてるサ」「-に決まつてるサヨー」は出てこない。これはサヨーに「-に決まつてる」という意味が含まれるからで、「-に決まつてるサヨー」と言うとき「決まつてる」が重なってしまうためである。

サヨーを使用しない若年層は、それに代わって「にきまつてるサ」を用いる¹²⁾。「にきまつてるサ」というコロケーションでの使用に変化しているのは、3.3.4.でも述べたように、方言らしさを感じられるサヨーを避ける意識がはたらくためであると推測される。また、サヨーの「LHL」という方言音調で必然性の意味合いを示すことよりも、「きまつてる(決まつてる)」という共通語表現を使うことで、意味理解の合理化と弁別化をはかっているためと考える。

7. 結論と今後の課題

本稿では山梨方言終助詞サについて、近世期から現代の用法を提示し、その意味用法変化に関して考察した。また使用の世代差の分析の中で、関連するサヨー、ヨーという形式についても論じた。

第1節で先んじて述べた結論を、付言しつつ再掲する。

- ・山梨方言終助詞サ、そして山梨方言終助詞ヨーは、近世期より文献で確認され、現代も引き続き使われている。
- ・山梨方言終助詞サの現代用法において、中高年層は提示用法と確信用法にサとサヨーを用い、若年層は提示用法にも確信用法にもサによる表現のみ用いるという用法変化が生じている。
- ・サの持つ音調が、文法性判断にも関わり、言語変化を生じさせる要因となっている。
- ・ヨーをヨとは別の山梨方言終助詞として立てることを主張する。サと同様、ヨーもその音調が言語変化を生じさせる要因となっている。

今後の課題として、サ以外の山梨方言助辞による表現との比較分析が挙げられる。3.3.1.で述べたようにサは共通語の「～んだ(のだ)」に相当するが、山梨方言では以下のような表現も使用される。

(49) 昨日のパーティー、太郎もいたよ (水石すみれ (2022) の (53))

(50) 昨日のパーティー、太郎もいたサ (水石すみれ (2022) の (54))

12) 水石すみれ (2022) では、提示用法でのサと確信用法でのサを異なる形態素と結論づける (p232) が、本稿の分析に基づくとサは形態素としては一つと考える。理由は二つ挙げられる。①中高年層は提示用法でも確信用法でもサとサヨーを用い、これらのサは同じ終助詞 (形態素) ととらえられる。②若年層が用いる確信用法は「にきまつてるサ」の形で使われ、確信の意味合いを担うのは主に共起する「にきまつてる」によるとらえられる。①の言語変化の旧用法の様相や、②の新用法の表現を見るに、本稿はサを形態素としては一つと考えるものである。

- (51) 昨日のパーティー、太郎もいたダ [「のだ」の「の」が沈潜したダ]
(52) 昨日のパーティー、太郎もいトー [過去助動詞「た」にあたるトー]
(5) これからバイトサ (再掲、水石すみれ (2022) の (11))
(53) これからバイトドー [断定助動詞「だ」にあたるドー]

「よ」をはじめ共通語終助詞の他、ダやトー、ドーなどの山梨方言助辞による表現と比較して、各表現の文法的条件や、意味類型の中でのふるまいを詳細に記述する必要がある。また、近世期資料や近代期資料については、引き続き資料を渉猟し、用例分析を進めたい。今後も、多様な面から山梨方言の分析を進め、日本語諸方言の中での位置づけを明らかにする考察を進める所存である。

■調査対象資料 (参考文献欄に掲載していないもの)

- 「旧観帖」(1805 (文化2) 年～1809 (文化6) 年)
「鄙通辞」(1810 (文化7) 年)
「甲州雑話見聞集」(1843 (天保14) 年以降数年間) 甲州文庫蔵

■参考文献

- 赤岡重樹編 (1925)「方言」『松のしらべ』(山梨県立甲府高等女学校々友会) pp77-104
秋山洋一 (2005)「会話集に見る山梨方言の文末詞とその用法 (1) - 北都留地区: 西原と真木 (上) -」『山梨県立女子短大地域研究』4 (山梨県立女子短期大学地域研究会) pp17-31
石川博 (1997)「『甲州雑話見聞集』翻刻・紹介」『山梨ことばの会会報』10 (山梨ことばの会) pp3-11
石川博 (1999)「『甲州雑話見聞集』をめぐって」『山梨ことばの会会報』11 (山梨ことばの会) pp16-21
石川博 (2004)「滑稽本『鄙通辞』の甲州方言」『山梨ことばの会会報』13 (山梨ことばの会) pp6-12
石川博 (2009)「滑稽本『旧観帖』の甲州方言」『山梨ことばの会会報』15 (山梨ことばの会) pp 右5- 右11
稲垣正幸・清水茂夫 (1983)「4 山梨県の方言」『講座方言学6 - 中部地方の方言 -』(国書刊行会) pp97-140
井上史雄・鏝水兼貴編著 (2002)「～サ (2)、～サー (1)、～サ (2)」『辞典<新しい日本語>』(東洋書林) p81
井上優 (2002)「モダリティ」大西拓一郎編『方言文法調査ガイドブック』(科研報告書、大西拓一郎) pp133-150
榎垣実 (1955)「近畿方言の文末助詞「サ」」『近畿方言』20 (近畿方言学会) pp10-14
小倉肇 (1985)「5 終助詞・間投助詞」鈴木一彦・林巨樹編『研究資料日本文法 第7巻 助辞編 (三) 助詞・助動詞辞典』(明治書院) pp225-250
国立国語研究所 (1951)「15. さ」『国立国語研究所報告 3 現代語の助詞・助動詞 - 用法と実例 -』(秀英出版) pp53-54

- 五緒川津平太 (2009)『キャン・ユー・スピーク甲州弁?』(樹上の家出版)
- 五緒川津平太 (2013)『キャン・ユー・スピーク甲州弁? ②』(樹上の家出版)
- 五緒川津平太 (2016)『なんちよにかかんちよにか』(樹上の家出版)
- 五緒川津平太 (2020)『キャン・ユー・スピーク甲州弁? ③』(樹上の家出版)
- 五緒川津平太 (2021)『私立じゃんずらけ小学校の楽しい甲州弁』(樹上の家出版)
- 小西いずみ・三樹陽介・吉田雅子 (2022)「山梨県早川町奈良田」セリック ケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一編『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』(国立国語研究所 言語変異研究領域) pp77-150
- 小松寿雄 (1971)「さ」松村明編『日本文法大辞典』(明治書院) p251
- 尚学図書編 (1989)「さ」『日本方言大辞典』上 (小学館) pp966-967
- 砂田貢 (2017)『改訂版「私の甲州弁辞典」』(私家版)
- 富樫純一 (2011)「終助詞「さ」の本質的意味と用法」『日本文学研究』50 (大東文化大学日本文学会) pp150-138
- 二戸麻砂彦他編 (2015)『山梨県の地域語の商業的、社会的有効活用に関する調査研究』(山梨県立大学地域研究交流センター2015年度調査報告書) (山梨県立大学地域研究交流センター)
- 日本語記述文法研究会編著 (2003)『現代日本語文法4 第8部 モダリティ』(くろしお出版)
- 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編 (2001)「さ」『日本国語大辞典』5 (小学館) pp1238-1239
- 藤原与一 (1985)『方言文末詞<文末助詞>の研究』中 (春陽堂書店)
- 藤原与一 (1996)「サ(サー)」『日本語方言辞書-昭和・平成の生活語』中巻 (東京堂出版) pp366-369
- 藤原与一 (2002)「山梨県南巨摩郡鰍沢町十谷の方言」『日本語方言辞書<別巻>-全国方言会話集成-』(東京堂出版) pp500-512
- 水石すみれ (2022)「山梨県甲府市方言における終助詞「さ」の機能について」『東京大学言語学論集』44 (東京大学文学部言語学研究室) pp211-234
- 山口明穂 (1971)「さ」松村明編『日本文法大辞典』(明治書院) pp250-251
- 山口明穂 (2001)「さ」山口明穂・秋本守英編『日本語文法大辞典』(明治書院) p271
- 山西正子 (2003)「現代語における終助詞「さ」の性格」『目白大学人文学部紀要』10 (目白大学人文学部) pp1-14
- 吉田雅子 (2023)「山梨方言終助詞シの用法と出自に関する考察」『明星大学研究紀要. 人文学部・日本文学学科』31 (明星大学人文学部日本文学学科) pp134 (61) -117 (78)
- 吉田雅昭 (2009)「新潟方言の文末詞「～ンサ」について」『ことばとくらし』21 (新潟県ことばの会) pp11-21
- 渡辺雄喜 (2005)『甲州弁を読む-てっ! ずくん、あるじゃん。-』(東京図書出版会)

付記

本研究は、研究分担者として参画する、JSPS 科研費20H00015の助成を受けておこなった成果の一部である。

【編集委員会特記事項】

本稿は、本委員会による厳正な査読を経て掲載に至った論文であることを証する。

日本文化学科主任 青山英正
紀要編集委員長 古田島洋介